フォト･ドキュメンタリー「ＮＩＰＰＯＮ」２００６
対談：鷲尾和彦　×　鳥原学

Guardian Garden PRODUCED BY RECRUIT

この対談は、出品者と選考員が、展覧会を目前にして作品の理解を深めようという主旨で行うものです。
２週目は、外国人旅行者向けの簡易宿に集まる様々な国の人々を撮影した鷲尾和彦さんと選考員の鳥原学さんです。

●差異化の果て

鳥原：この作品は撮影期間はどれくらいなんですか？

鷲尾：昨日も撮りに行っていました。ちょうど一年になります。

鳥原：２００５年の８月に、この『極東ホテル』というテーマで四谷三丁目のギャラリーＲｏｏｎｅｅ２４７Ｐｈｏｔｏｇｒａｐｈｙでも展示されていたようですが、どういう展覧会をされたんですか？

鷲尾：作品は額装しないで、プリントを直接壁に貼るという展示でした。今撮影してきた、というスピード感も伝えたかったし。この『極東ホテル』というテーマに取り掛かる前に、４、５年かけて沖縄の八重山諸島に通っていて、本当はその写真を展示しようと思ってたんですが、Ｒｏｏｎｅｅのオーナー篠原俊之さんに「１０年目だから新しいテーマでやってみたら？」って言われて。生まれてはじめてカメラを買ってちょうど１０年目だったので、自分の中でちょっと節目として新しい写真展をやりたいと思って、篠原さんに相談して。それが２００５年の５月のこと。１枚も撮ってないのにスケジュールだけ３ヶ月後に決めたんです。Ｒｏｏｎｅｅでの写真展の後もすぐにまた撮り続けました。それで、結局今年の５月までに東京と大阪で合計３回の写真展を行いました。写真展の度に写真が増えたり、変わったりしながら。

鳥原：プロセスを見せてきたって感じかな。そうやって制作過程を自分で確認しながら展覧会ができるなんていいですね。篠原さんとはどうして知り合ったんですか？

鷲尾：以前、ワークショップでお世話になっていたんです。「ゾーンシステム」のワークショップでした。僕は写真はまったく独学で、始めたのも２０代の後半と、とても遅かったので。

鳥原：どうして外国人旅行者向けの簡易宿を撮ろうと思ったんですか？

鷲尾：一番大きな理由は、この宿の女将さんととても幸運ないい出会いがあったってことですね。この宿は、台東区の山谷エリアと呼ばれていた場所にあるんですが、そこに行った時、「ここで何かできる」と直感しました。それがちょうど写真展をやろうって決めた時だったんです。

鳥原：じゃあ、全部つながってるんだ。ちょうどいろいろなタイミングが重なったんですね

鷲尾：もう運だけで生きていますね、僕は。写真のテーマとして、僕の中には常に「今暮らしている場所、町、国ってどんなところなのか」ってことがあります。以前撮っていた平塚とか湘南周辺も都市と地方とのマージナルなエリアでしたし、八重山諸島は日本という国の南端です。八重山に通っていた時、次はもっと近く、日々を過ごしている場所で撮りたいと思っていました。それで、偶然、東京にあるこの宿に出会った。東京は世界的にも情報が過度に溢れている都市です。でも本当はどんな場所なのかってかえって見えにくい。本当の姿なんてないかもしれないけど、僕なりに一度そのテーマに取り組んでみたいって思っていました。それで、この宿に集まる海外からの旅行者の存在を通して、僕も旅行者になって、旅人の視点で、もう一度自分の暮らしている場所、東京、日本というものを再発見してみたいと思ったわけです。

鳥原：Ｒｏｏｎｅｅでやってみてどうでした？　お客さんの反応とか。

鷲尾：僕も最初はどんな反応があるのか全く予想できなかったんですね。でも意外にも「私たちの街が写ってる」という感想を持つ人が多かったんです。写ってるのは全部見知らぬ外国人ばかりなのに。

鳥原：空間によって規定される何かがあるんでしょうね。僕は「狭さ」だと思ったんですが。いわゆる旅行者が出入りするホテルとは空間性がちょっと違うかな、って。この被写体との距離の取り方は、かなり空間に拠る部分があると思う。お互い中立的な立場で話しができる距離感。まさに東京という感じがする。東京的なものっていうのは写っていないのに。

鷲尾：東京っぽい記号を入れていないのは、少し意識しています。結果的に標準レンズで向き合って撮っているのでこんな距離感になるのですが。でも、日本が写ってるってことで今回選んでいただいたんですよね。それは何故でしょうか、逆に尋ねてみたいですね。「ドキュメンタリー」ってともすれば記号を追いがちになる。記号を集めるようなアプローチも「記録」や「情報」の価値という点ではありえるとは思いますが、僕はそれとは違うことをやりたいと思っています。

鳥原：違うことっていうのは、制作意図に書いてあった「差異化の果てにあるものを見たい」っていうことですか？

鷲尾：はい。例えば、国籍や年齢、職業など、人が既存に持っている情報や記号を取り去ることで見えてくるもの、僕はそれが見たいといつも思っています。それができるのって、唯一「写真」というメディアだと思うし。結局は必ず「それが、そこにあった」という記録ではあるのだけど、それでもその先にあるものをもっと意識的に見てみたい。そこに「写真」の可能性があるんじゃないかなって思っています。写っているのは全て海外からの旅行者だけど、国籍も年齢も職業も写真には記されていません。でもそういう記号や属性を超えて、何か共感をするものがあるとすれば、そこに記号では表せない何かが写しだされているんじゃないでしょうか。

鳥原：可能性を感じさせる写真ですよね。悪く転べば、記号を排除してしまうと写真自体が成り立たないこともある。難しいですよね。

●コミュニケーション

鳥原：人にレンズを向けてみて戸惑いみたいなものはありましたか？

鷲尾：もともと僕はあまり人怖じしないっていうか、国籍や性別とかあまり気にしないんです。

鳥原：不思議なのはほとんど向こうも意識してないですよね。すごいナチュラルな感じ。なかなかできませんよね。意識させて撮るっていう逆のアプローチもある。でもこういう風に空気みたいにフッといて、寄り添っている感じっていうのは、今の時代の人に対する関わり方が出ているのかなと思うんですよ。そういう意味では今の「ニッポンの人」みたいな感じがした。

鷲尾：「今の時代の人に対する関わり方」というのはどんなものなのか、僕は他の人のことはわからないのですが、結果として写ってる写真は、ある種の親密さがあるかもしれません。一人ひとり実は結構時間をかけて撮影していることが多いですね。サーッと行って何となく撮ってる写真はほとんどないんです。

鳥原：ちゃんとコミュニケーションを重ねた上で撮ってるんですね。

鷲尾：そうしないとやっぱり不審者ですから。全員に声をかけて、目的を伝えて写真を撮っているし、こういう形で使いたいってちゃんと説明しますね。あまり話さず、街中でサッとスナップ写真を撮るという方法論もあるし、僕もそんな風に撮影することがありますが、今回は全く違うアプローチですね。

鳥原：撮る目的って例えばどんな風に説明するんですか？

鷲尾：「僕は自分が住んでいるこの日本に興味があるし、何故あなたがこの国に来たのかということに興味があります」って。一応そういう説明もするけれど、実はそれよりも「こいつはちゃんと写真を撮りたいんだな」ってことが伝わるのが重要かもしれません。「僕は写真家だから、ちゃんと撮ります」ってことも大事だと思う。つまり中途半端な興味じゃなくて、何かテーマがあって写真を撮っているっていうことがわかれば、向き合えるんです。

鳥原：話をしてから、シャッターを切るまで撮る時間があるんですよね。

鷲尾：人によりますよね。実は昨日も一日、宿で知り合った外国人と一緒に東京の街に出掛けたんです。実は、宿の外まで付き合った人ってあまりいないんです。この宿の中で撮ろうって思っているし、そこで見たいと思っているから。結局彼とは非常に長い時間一緒にいたけれど、あまり写真は撮っていません。逆にほんの一瞬でも撮れる人もいるんですよね。必ずしも一緒にいた時間の長さとは比例しない。

鳥原：写真を撮る時ってどうしてるんですか？　ポーズをとってもらったりしてるのかな。

鷲尾：話しながら撮るって感じ。ポーズをとってもらうことはしないけど、結果的にはカメラを持ち出すことである状況をつくりだすことにはなっていますから。この前、「ボーリングフォーコロンバイン」で有名になってしまったコロラド州の高校を出ていて、今はファーストフード店で働いていているという、１８歳のアメリカ人の女の子と出会ったんですが、彼女が本を持っていて、それは「ブッシュ政権の核戦略」に関する本だったんです。僕は何故彼女がここにいるのかとても興味があったので、２人でずっと話してました。単純にその人のこと知りたいって思う。コロラド州の高校を出た女の子が、深刻な本を片手に、それでも凄く陽気な顔して日本のこの宿にひとりで泊まってるって、どういうことか、単純に知りたい。アメリカ人でパスポート持ってるのって１割くらいでしょ？　その中で、この女の子が高いお金出してわざわざ僕らの国に来てるってことはどういうことなんだろうって。それで話しながら、彼女の写真を僕は撮っているわけです。そうしてだんだん距離が近づいていっていつか写真が撮れている。

鳥原：いろんなこと知っていないとダメですね。

鷲尾：ツアーガイドやってるみたい。普通に話している時間が圧倒的に長いですね。写真撮ってる時間なんてほんの僅か。

鳥原：ところでその子はなんで日本に来たの？

鷲尾：理由を言葉にしてもあまり驚くようなものじゃないですよ。その子の場合は、広島や京都に行きたいとか。他の若い人達だと、例えば秋葉原でキャラクターグッズを買いたいとかね。

●フラットな関係

鳥原：この人たちは基本的に短期滞在者なんですか？

鷲尾：東京には一週間だけど、この後ここ行って、あそこに行って、とか最低でも２、３週間という人が多い。逆にトランジットで一晩だけって人もいますね。

鳥原：本当にいろんな人がいるんですね。子供からおじいさんまで。ここでいろんな人と出会ってきて、鷲尾さん自身が日本人としてどう思われてると思いますか？

鷲尾：ここはドミトリーじゃなくて、小さな個室が並んでいるという構造だから、結局一人ひとりのパーソナルな空間が保たれているんですね。それもあって、日本人の僕が同じ宿に泊まっていても国籍とかはあまり関係ない感じですよね。逆に僕もそうだし。そういう意味ではフラットな関係。誰もがここでは通過していく一人の「個」という感じです。

鳥原：だから、旅の持つ不思議な宙ぶらりんの関係でフラットに話し合える。

鷲尾：そうですね。だから『極東ホテル』というテーマはここの宿でないと撮れないと思います。同時に僕はいつも同じ場所に居て、目の前で様々な人達が通り過ぎているのを見ている。移動していないのに、凄い旅をしているような感じですね。

鳥原：今は外部への関心がなくて、自分にも関心を持ってもらいたくない、見えないバリアにそれぞれが覆われている社会のように思える。そんな中でどうやって人とコミュニケーションして、異文化から理解されて受け入れられていくかって考えると、鷲尾さんのような態度は明るいなと思う。このフォト・ドキュメンタリー「ＮＩＰＰＯＮ」の選考会でも、シリアスな写真が多いって話していて、鷲尾さんは人との関わり方とか、ものの見方とか底抜けに明るいってわけじゃないけど、関心があって撮ったという態度が写真に表れていると思います。ところで小泉内閣が日本を観光立国として整備しなおそうとしてますよね。彼らは観光国として日本の情報をどのように入手しているのですか？

鷲尾：政府の観光立国政策についての詳細はよく知りません。でもまあ想像はつきますね。話しは少し変わるかもしれないけど、この宿に通いだして、やっぱりインターネットの力は大きいと実感しました。今、圧倒的に吸引力があるのは日本のアニメとかポップカルチャーです。インターネットを通じて得た情報をもって、たくさんの人が海外からダイレクトに日本のある特定の小さな場所にピンポイントに来ている。例えば以前出会ったドイツから来た女の子達は渋谷の「サイクロン」ってライブハウスにインディーズのバンドのライブを観るためだけに来ていました。「サイクロン」って東京に住んでいる人でもよほど音楽好きな人しか知らない人と思います。でもそういうところにこそ海外からの旅行者達がいたりするわけです。「インバウンド（日本への入国旅行）」と「アウトバウンド（海外への出国旅行）」の不均衡っていつも観光政策では問題になりますが、こうした草の根的なネットワーク、あるいはポップカルチャーの力が結局こうした課題の解決策になるのだと思います。

鳥原：それは「日本」というより「東京」なんでしょうけどね。そういう情報の溢れかたは他の地方ではしないと思う。

鷲尾：確かに東京がもっともアクセスされるだろうけど、決して東京の事だけではないと思います。今、全国に外国人旅行者向けの簡易宿が増えていま

す。僕が撮影している宿もそうだけど、知らないうちに、全国にまるでネットワークの「ハブ」のようなこうした場所が沢山存在している気がします。国も人種も文化も異なる個人が、瞬間的に集まって、また散っていくという光景は、東京というか都市の姿をすごく象徴しているような気がするんですね。最初は海外からの旅行者が何故この国に来ているのかを見てみたいという、割と左脳的な発想だったんですが。実はそれを追ったからといっても見えてくるわけじゃないんですよね。むしろ様々な人達が入れ替わり立ちかわり、通り過ぎながらこの街、この国の姿をつくり変え続けているんじゃないかなと思います。その営みそのものが象徴的に現われているのが、例えばこの小さな宿なんだと思う。そこに残る気配とか空気のようなものが実は一番今のこの街、この社会を表していると思います。

鳥原：そういう状況が日本のある現実を示しているのか、東京は東京なのかよくわからなくなりますね。東京の情報量の多さは特殊。ＮＹとかいってもそんなでもないですよね。

●ドキュメンタリー写真

鳥原：好きな写真家って誰ですか？

鷲尾：僕はダニー・ライアンって写真家が好きです。５年程前に彼の家まで訪ねたことがあります。彼は今からちょうど４０年前の１９６６年にジョージ・イーストマンハウスで開催された『Ｔｏｗａｒｄ Ａ Ｓｏｃｉａｌ Ｌａｎｄｓｃａｐｅ』展に参加して注目されましたよね。従来の記録のためのドキュメンタリー写真ではなくて、私的な視点から身の回りの社会的風景を撮影して、'６０年代以降の新しい写真の可能性を呈示した。今は当時とは時代が違うけれど、「ソーシャル・ランドスケープ」って視点は、僕自身にとっては今とても意味がある気がしています。今回の『フォト・ドキュメンタリー「ＮＩＰＰＯＮ」』に参加したいと思ったのもそんな理由からでした。誰もが写真を撮る時代の中で、それでも何故写真を撮るのか、そのことを考えると、やはり社会に積極的に関わっていくという視点、しかも世の中で既に流通している記号を捨てて、自分なりに社会を見ていくという視点、やはりそれをどれくらい強く意識できるか、ってことじゃないかなと。

鳥原：「私写真」って一時期ちょっと言いすぎましたよね。「私写真」って「私」を成り立たせているものについての写真と考えなくてはならない。つまり他者を排除して、「私」の感性、「私」の生活、「私」の愛というものだけになってしまった気がする。「私」とは何か、「私」と社会との関係を撮り直さないといけないし、そういうものが見えないと写真ってつまらないと思う。恐らくダニー・ライアンはそういうことで撮り続けているんじゃないかな。

鷲尾：僕は写真の学校に行ったことがないので、周りには写真を撮っている知人が殆ど居ないんです。そのことが逆に僕にとっては良かったと思います。

鳥原：最近『ひとつぼ展』とか『写真新世紀』とか見てて、若い子たちが苦しそうだなって思う。新しいことを求められてるわけじゃないと思うけど、すごくひねり出してる感じがして。'９５年くらいに女の子の写真が出てきた時は、喜びに満ちていて、「写真ってこんなに楽しいんだ」って。最近は写真表現がしづらくなっている気がする。写真史って常にアバンギャルドとリアリズムを行き来している。表現で絵筆のように写真を使いたい、という根本的な願望と、その一方であるものをありのまま記録したいという願望もある。それは混然一体としていて、どちらかが強いかはその時代時代で出てくるんだと思う。

鷲尾：ドキュメンタリー写真もひとつの「表現」だと思いますが。

鳥原：表現の手前にあるものが重要だと思いますね。いわば化学反応みたいなものなのかなと。自分の興味があって、こういう知識があってこういう生き方して、ある被写体に向かうと、こんなものが関りの中から出てくるという。

鷲尾：自分と世界との関わりの中で生まれてくるものが、「表現」であり「アート」ですよね。ドキュメンタリーもそのひとつのアプローチだと思います。僕自身の写真については、ドキュメンタリーというよりも「ストーリーテリング」っていう方がしっくり来るんですが。

鳥原：私たちは鷲尾さんの作品のコンセプトを読んで共鳴したわけです。ビジュアルだけ見た場合はそこまで読みとれなかったかもしれない。作者がいて、その作者がこういう事を感じた、伝えたいんだというメッセージとともに見ていくのがドキュメンタリーじゃないかな。
見る人との共通の理解を得るためにはステートメントが一枚あると、そこからいろんなことが想像できる。これで縛るというのではなくて。写真を開くという機能です。

鷲尾：写真にしか表現できないものもあるし、逆に言葉だからこそ伝えられることもあると思います。伝えたいことの前では、表現の方法はもっと自由で良いと思います。必要であれば、僕は言葉を書くこともしますし。

鳥原：ともあれこのテーマを見つけたところで、もう答えは出ているから、あとは撮ることに集中すればいいわけですよね。そして撮った写真をどう読みとるか、自分の行為をね。

鷲尾：時間をかけて何度か展覧会をやりながらできてきたって感じですね。今度の展示も、どんな感想を持ってもらえるか、楽しみです。まだしばらくは「極東ホテル」通いが続きそうです。

２００６年６月７日（リクルートＧＩＮＺＡ７ビル）